

五色池通信

286 2009年 9月 11日 発行

中土手に自然を戻す市民の会

東京都江戸川区東小松川3-35-13-204

〒132-0033 Tel 3654-7240 Fax 03-3654-7256

ホームページ: <http://www.cleanaid.jp/nakadote/>

葛西の海辺で干潟遊び

7月25日、葛西臨海公園の鳥類園南側のいつもは海水が満ちているところが、当日は大潮の干潮時間帯で広い干潟が現れ、大勢の人が潮干狩りを楽しんでいた。

荒川クリーンエイド・フォーラム主催の「夏休み水辺の楽校」が、鳥類園のレクチャールームとその周辺で開催され、参加した子どもたちは、シジミやカニ、小魚など取るなどして楽しく遊んでいた。

江戸川区内では、人口干潟の西なぎさにはこのような場所がありますが、それ以外では海の干潟はここだけと思われる。



発表があり、注目された。

こども海の作文・絵画・工作コンクールがロビーに展示され、大勢の子どもたちが参加して入賞者表彰が行われた。

東京湾にはたくさんの魚が戻り、アマモ場の再生やワカメの養殖実験も成功しており、これらの生き物が元気になれば、海もきれいになり、葛西の海で泳げる日も後一步という感じを受けた。
(佐藤正兵)

海水浴場復活シンポジウム

8月30日、タワーホール船堀で、NPO法人ふるさと東京を考える実行委員会主催の「海水浴場復活シンポジウム 東京湾から発信する」が開催され約650名参加。

同実行委は、カキが水を浄化する実験を重ね、西なぎさにカキ礁を作るなどして、海水の透明度を高め、西なぎさを泳げる海にしようという計画を発表。昨年「葛西海苔プロジェクト」が発足し、たくさんの海苔を収穫して小学校数校で海苔すき体験を実施した。

横浜市や千葉市では海水浴場があり、夏にはたくさんの人が海水浴を楽しんでいる。長崎県の大村湾ではカキの養殖場に空気を送り込んで、元気に大きく育てた事例の



9月と10月初旬の行事予定

9月13日(日) 下平井水辺の楽校

10:00 生物調査、投網、干潟遊びなど

9月20日(日) 中土手五色池

10:00 秋の鳴く虫を探そう

10月3、4日 江戸川区水辺活動交流会

10:00 タワーホール1階展示ホール

18:45 月夜の荒川 虫の音探し

終了 4日16時



ミズガキ交流会 天然アユ捕獲

8月22、23日、荒川中流部、熊谷市を中心に、NPO法人荒川流域ネットワークの一部門「荒川流域再生プロジェクト」主催の荒川流域再生シンポジウム(第13回)が開催された。

同プロジェクトは「魚の行き交う川づくり」を目標に活動を進め、今年は「天然アユの遡上支援作戦」で注目を浴びている。これは、東京湾で育って荒川を遡上するアユが、農業用の堰などでその上流に遡上できなくなっている実情を調査し、対策を検討する活動。

今回のメインテーマは「魚を増やす川づくり」で、22日午前に熊谷市商工会館会議室で、以下のテーマで講演会

講演1 旧新川村の解説 平 秀子氏

講演2 漁具の種類と今昔 三谷和正氏

午後は、旧新川村敷地近くの荒川で伝統漁法の紹介と投網による魚獲り、夜は東松山市の「風と土の館(野田)」で夕食と交流。ここで、午後、荒川で獲れた20数センチの天然アユの塩焼きをたんまりといただいた。

23日は シンポジウムと「みずかけ“サ”論」、会場は「風と土の館(野田)」の作業場を改造した集会室。

「入間川アユ放流調査の中間報告」を事務局から脂ビレを切った指標天然アユの遡上調査の中間報告。

シンポジウムは「荒川の恵と漁法について」

中央漁協理事の新井正夫氏から報告がなされ、それ



を受けて「みずかけ“サ”論」が行われた。参加者からは、各漁協の総会に働きかけるなどして、荒川の川漁復活に向けた活動を広めていこうと呼びかけがなされた。

(佐藤)



ヒヌマイトンボの発見地涸沼で 発見者廣野誠氏のお話を聴く

7月17日、ヒヌマイトンボが始めて発見された茨城県の涸沼を訪れ、発見・命名者の廣瀬誠氏のお話をうかがう機会をいただいた。以下に概要を記すが、荒川でのヒヌマイトンボの保護活動に活かしてゆきたい。

ヒヌマイトンボは5月から8月に掛けて羽化し、栄養がよければ、年2回羽化するものもある。(25℃以上で飼育すれば通常は可能)

幼虫の餌はワムシ(動物性プランクトン)で、成虫の餌はアブラムシ(ヨシにつく白い羽のあるもの)やヨコバイの幼虫(羽がない)で、成虫の天敵はオオヨシキリ(巣の下に大量のヒヌマイトンボの羽が落ちている)とアオモンイトンボやである。

幼虫の天敵は、クロベンケイガニ、ハゼなどの魚。産卵はヨシの腐りかけた葉の葉肉の部分に産み付ける。(養殖の場合はバナナの皮でもよい)

水分が涸れてしまうと生存できない。(泥のひび割れの最後の水溜りで生き延びる)

環境が汽水ではなく、真水になると、アオモンイトンボだけになってしまう。

ヨシ原はヨシだけでなく、オギやショウブ、カヤツリグサ、



涸沼で撮影したヒヌマイトンボのオス

スゲ、クサヨシなどの複合植生の方が適していると思われる(ヨシだけでも生息するが)。水の流れが必要で後背地からの雨水、または、潮の干満による流入と排出が必要で、淀んでしまうと良くない。(干潮でも水が若干残ることが必要)

移動距離は最大でも200メートルほどで、風に運ばれてもっと移動する(1km)場合もある。

棲息の条件は、天敵の排除 魚(アベハゼなど)、カエル、ザリガニ、(クロベンケイガニ、オオヨシキリは無理?)

観察場所 ヨシを刈って空の見える開放水面と空間を作る。(1坪ほど、帯状でも良い)。夕日に集まる習性がある。

以上(佐藤)